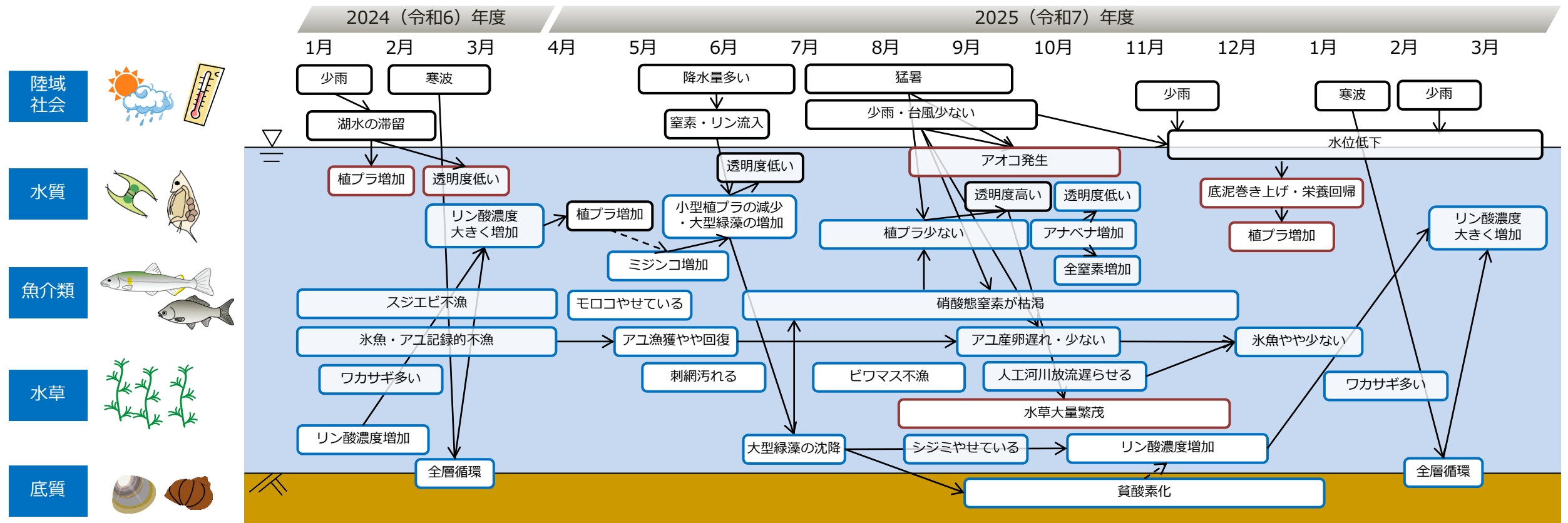


2025（令和7）年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性 （「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームの成果等より）

凡例： 北湖・南湖の現象 北湖の現象 南湖の現象
 ———> 因果関係がある可能性が高い
 - - - -> 因果関係ははっきりしないが可能性が疑われる



※この模式図は、琵琶湖の状況について関係者の意見等を整理したものであり、各事象間の関係性について科学的に実証されたものではありません。

滋賀県では、琵琶湖の生態系のバランスを是正し、本来の在来魚介類のにぎわいを復活させるため、行政、事業者の枠をこえた「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームを結成し、琵琶湖で生じた現象の把握や課題の整理を行っています。本チームで議論した内容を踏まえ、令和7年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性を時系列に沿ってまとめました。なお、このまとめはチーム員の個人的な意見を幅広く取り入れており、学術的な検証を得ていない結果を含んでいることにご注意ください。

令和7年度は令和6年度と同様に、年間を通じて気象の変動が大きく、猛暑や少雨などが琵琶湖の水質・生態系に大きな影響を与えました。北湖では、令和6年度末の全層循環により表層でリン酸態リン濃度が大きく増加し、春先にそれを栄養として植物プランクトンの一種である黄色鞭毛藻が増加しました。それを餌としたかどうかは不明ですが、その後ミジンコ類が増加し、小型の植物プランクトンが減少しました。続いて、5～6月の降雨による栄養塩の流入もあって、ミジンコ類の餌にならず、また小型の減少により競合相手の少なくなった大型緑藻のミクラステリアスが増殖し、透明度が低くなりました。増殖したミクラステリアスは表層の硝酸態窒素を吸収して湖底まで沈降し、そこで酸素を消費して、9～12月にかけて湖底は貧酸素状態となりました。また沈降物の分解などが原因となり、湖底付近でのリン酸態リン濃度も高くなりました。表層で窒素が枯渇したことや猛暑により、7～9月は植物プランクトンが少なく、9月の透明度は過去最高となりました。一方で10月になると窒素（ N_2 ）を固定できる藍藻類であるアナベナが増加し、透明度が低く、全窒素が増加しました。冬は1月に気温が下がった影響で2月中旬に全層循環を確認しましたが、その後表層のリン酸態リン濃度が2～3月にかけて大きく上昇し、過去最大値となりました。南湖では、8～10月にかけてクロモやコウガイモなどの水草が南部や西部で大量に繁茂しました。また8～10月には、県内を通過する台風がなかったことや少雨により水が滞留し、局所的にアオコが長期にわたり発生しました。総じて、令和7年度は令和6年度と類似した水質の季節変動となりました。

魚介類については、令和5、6年度に引き続きアユが少なく、記録的な不漁が続きました。春にはやな漁で漁獲がやや回復しましたが、夏の猛暑や少雨の影響により、河川の水温が十分に下がらず水量も不十分で、秋の産卵数は平年の6割程度に止まりました。一方で、湖水温の上昇を受けて人工河川において流下時期を遅らせる対策を取ったことも功を奏して、12月の氷魚漁では平年より少ないものの、注文量を満たす漁獲がありました。ワカサギや南湖のホンモロコは漁獲量が増加していますが、やせたものが多く、成長に必要な時期に餌が十分でないことも懸念されています。



透明度の高い北湖（9月）



南湖で大量繁茂した水草（9月）



南湖で発生したアオコ（10月）



氷魚の釜揚げ（1月）